巻 頭 言

アドバンス助産師の現況と期待すること

Current status about certification of advanced midwife and expectation

高 岡 智 子 (Satoko TAKAOKA)*

(日本助産学会編集委員)

一生のうちに1人産むか産まないかというレベルに出生率が低下する中、出産年齢の高まりや不妊治療の増加等により出産する女性のリスクは高まっています。このような背景の中、安全で、かつ満足度の高い助産ケアが提供されることは社会的要請になっています。そのような社会背景に答えるべく、2014年、日本助産実践能力推進協議会(日本看護協会、日本助産師会、日本助産学会、全国助産師教育協議会、日本助産評価機構)により助産実践能力習熟段階(クリニカルラダー/CLoCMiP[®])レベルⅢを認証する制度が創設されました。これは、日本助産評価機構が申請者の臨床経験、研修の受講状況、知識の獲得状況を審査、認証する制度で、認証された助産師は「アドバンス助産師」とよばれます。申請には分娩介助件数100例以上、妊婦健康診査200例以上など、多くのマタニティケア能力が求められていますが、大勢の助産師が認証を受けています。2015年に5,562名、2016年には5,440名と、2年間で1万人以上ものアドバンス助産師が誕生しており、既に就業助産師のおよそ3分の1(32.4%)にも上っています(日本助産評価機構 機関誌 アドバンス助産師より)。

認証制度がもたらした大きな変化として、本認証制度が更新制であることが挙げられます。これまで日本では助産師免許を取得した後のスキルアップは、個人や所属機関の意識に任されていた。このような状況にあっては、助産師は専門家としてのスキルアップというよりは、組織の中における個人の課題を解決することばかりを優先してしまいがちです。本認証制度

により、アドバンス助産師は助産師として一定の、共通の基準に沿って自己研鑽をつむことが期待できます。研鑽を積み重ね、最新の知識とプロ意識を備えた助産師がケアにたずさわることは女性とその家族に安心感と信頼感を与えますし、言うまでもなく、より安全で、より満足度の高いケアにつながっていくものと思います。また、アドバンス助産師が定期的に審査にパスし、一定の助産実践能力を有した存在であることを可視化し、これを社会に示す意義も大きいと考えます。2017年3月31日発行の厚生労働省医政局地域医療計画課長通知「疾病・事業及び在宅医療に係る医療体制について」では、「周産期医療の医療体制構築に係る現状把握のための指標」のひとつとして「アドバンス助産師数」が明記されました。医療計画の指標としてアドバンス助産師が活用されるということは、既にアドバンス助産師に対する社会の期待が高まっているあらわれと言えそうです。

今後、2020年には初回の更新申請が開始されます。「一般」「看護管理者」「教員」「助産所管理者および助産所に勤務する助産師」の4つの区分が設けられ、多くの助産師が知識や技術をブラッシュアップして更新申請し、専門性を高めていくことが期待されています。

ハイリスク妊娠、ハイリスク分娩が増加する中、ともすると助産実践能力への自信が揺るぎかねない状況の中にあって、認証制度は助産師が助産師としてのアイデンティティを確認し、成長へのモチベーションを持続けることにつながるものと思います。認証を受

* 山梨大学大学院医学工学総合教育部 (Graduate School of Medicine and Engineering, University of Yamanashi)

けることがゴールではなく、スタートであるという認識を共通に抱き、助産師が生涯、スキルアップを続けるための礎として本認証制度が機能することを期待しています。そしてまた、日本助産学会編集委員会では質の高い論文を迅速に掲載できるように努めて参りますので、研究で得られた最新の知見を日々のケアに取り入れ、エビデンスとして活用してくださることをアドバンス助産師の皆様にご期待したいと思います。

一般財団法人日本助産評価機構 すべての助産師の
キャリア開発を支援する機関誌
アドバンス助産師 創刊号(2017. 8月号)
日本助産評価機構 <http://josan-hyoka.org/>
厚生労働省 第7次医療計画 疾病・事業及び在宅医療に係る医療体制について
(別表) 医療体制構築に係る現状把握のための指標例
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/iryuu/iryuu_keikaku/index.html